

あそ

11

2011



清澄庭園

恩田秋夫の  
一茶俳句切手



御祭りやびらうどの牛銀すゞき  
御射山や一日に出来し神の里  
国中は残らず諏訪の尾花哉  
すは山の風のなぐれか尾花吹  
軒葺も芒御はしもすゞき哉  
一日の名所也けりお花小屋  
芒箬見たばかりでも涼しいぞ  
すは山やすべた芒も祭らるゝ  
ちくはぐの芒の箬も祝哉  
ちつぼけなほ屋から先にそよぐ也  
花芒ほやと成ても招く也  
祭礼の間に合にけり縞芒  
小盥や我みさ山のすはの海  
へし折し芒のはしも祭り哉  
御射山の晴にくねるか女郎花  
御謝山やけふ一日のはなすゞき

一茶

今月の「御祭」は御射山祭といふ信州のお祭りらしい。  
旧暦の七月下旬におこなはれてゐたが、今は新暦八月の  
最終土曜日に行はれる。鎌倉時代から続く武家を中心と  
した祭りのことである。

# あそ

十一月

笹舟は 佐藤喜孝

凌霄の空中樓閣蟻のぼる

蓮の雨SPレコードの針音

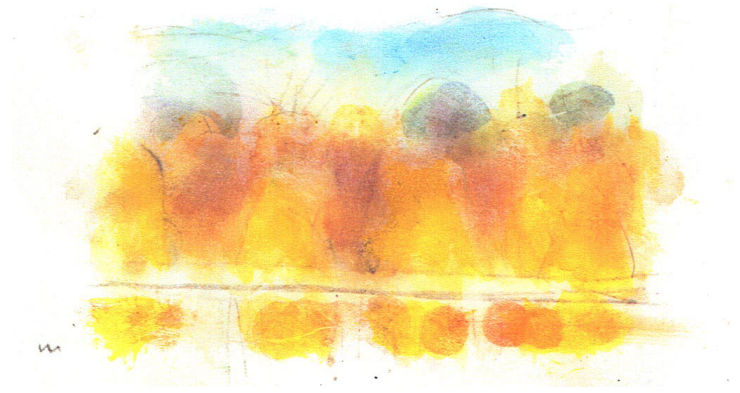
どこからか光が洩るる夏頭

年ごとに引力増ゆる秋の風

鍵かけるほどでもないか晝の蟲

笹舟はおそろしき舟月あかり

じゆず玉やかあちあんはみなでべそなり



毎日ホームページの更新のため季語と向きあつてゐる。その折『あそ』の作品を目にする。このやうな句があつたのかとメモする。

三々五々虚子忌日和の句会かな  
囲碁将棋つひに覚えず春行けり  
額の花影のごとくに残りをり  
冬の夜ユニットバスに窓はなく  
猫よけの水のくすみや秋の昼  
読返すとかなかなかである。

俳句はもしかしたら時間が熟成させてくれるものかもしれない。『不易流行』といふ言葉をおもつた。俳句に鮮度といふものがあれば直ぐに古くなるのが道理。時の中に置いておいて燻銀のよさが出てくる何気ない俳句を作りたいものだと思つて物ねだりをしてゐる。因みに作者は、喜久恵・弘子・泰江・須磨子・美代子の諸氏。

## 枯 芒

定梶じょう

台風下匂ひて叩き牛蒡かな

まん丸くなりたし消燈後の檸檬

つづれさせ夜半に時化てくるといふ

秋思ただコップ一杯分の吐息

コスモスの伸びはうだいの中に杭

通夜更けぬちろしば鳴く刻も過ぎ

枯芒伊賀の忍者が出てきさう

## セシウム

須賀敏子

黄金に稔る田の畦線量計

新米のあきたこまちやセシウムなし

台風がドレミファ橋を流しけり

ちちろ鳴く繕ふよりも捨てちまう

新涼やヨーガで深く呼吸する

明月や今日は門灯つけぬまま

ケータイの届かぬところ松虫草

私の住まう処は通称「船員住宅」

という。一体に外国航路の船員の多い地方のため、日本の船員組合に関する団体が造成した建売住宅地。船員ではなかったが知人の名義を借りて購入。丁度、造成時と結婚した時が重なった。町内五十軒ほどの内が船員住宅で、外観・間取り等みな同じ。住っているのは、ほとんどが近隣の次男以下。因みに私は三男。

そして雨ともなれば、同じ軒先に同じ量の雨滴をうけて雨煙る。海風の激しい所なので数年たつと樋が破損。今度はどの家の軒先からも雨垂れが同じようにしたたることになる。

景、壮観。あるいは寂寥観。

時雨来よ張三李四の軒々に じょう

## 祝 島

「ミツバチの羽音と地球の回転」の上映会に参加した。鎌仲ひとみ監督のドキュメンタリー映画で、二〇一〇年の作品である。

祝島は山口県上関町にある人口五〇〇程の小さな島である。

一九八〇年代中国電力が上関原発計画を決めてから、漁師を中心に二〇年近くも原発反対の運動が続いている島でもある。映画は反対運動と共に島で暮しと行事が描かれている。その他脱原発を決めたスエーデンでの多様なエネルギー開発も取材している。地味な映画である。

そして三月十一日東日本大震災と福島原発事故。この映画は静かに広がりがつつある。今こそ日本中の原発を停止させることを望む。

遠花火

竹内弘子

いちにちの煮焚のをはり遠花火  
雉鳩の古巢かぐるし梅雨に入る  
已にして芋殻のこの世ならぬ軽さ  
日毎見て柘榴の裂ける時を見ず  
犬病めば犬がだいじや桜桃忌  
大蟻と小蟻とつひにかかはらず  
青柿の下病犬の毛を梳くも

良夜

田中藤穂

鎮魂の花火の鶴は羽撃ちたる  
良夜ですと独りごちして雨戸鎖す  
名月に魅せられ草にかぶれけり  
乳呑み子は黒目勝ちなり葛の花  
老人パス貰ふ順番秋暑し  
敗荷となるに間のある青い風  
大僧正の棺白菊もて満たす

台所しごとをすつかり終ると、九時は過ぎていく。夕食の頃から始まった浦和競馬場の花火は、連続音と共に終演となる。大宮から浦和に移ったばかりの頃は娘たちと三人で観に行ったものだ。大宮から連れてきた仔犬のカジは浦和で十七才の老犬になり、娘たちもそれぞれ家をはなれ、わたしたちはまた大宮は氷川神社の近くに住居なすことになりました。



私が田端へ嫁に来た昭和二十二年の秋、主食はまだ配給で、一軒ほどの秋、主食はまだ配給で、一軒ほどの配給所まで行つて家族六人分の米や蜀黍粉、小麦粉、さつまいもなどをリュックで背負ってきた。重かった。終戦から二年半たつていたがどの町も爆撃で焼跡だらけ、帰還兵の姿も時折見かけられた。家も外燈も少なく暗く、そのかわり天の川も昂も北斗星も毎晩よく見えた。

“家々や菜の花色の燈をともし”は私の大好きな木下夕爾の句だ。戦争中は敵機から見えないように電灯を黒い布で覆っていた。十五日に終戦二十日に燈火管制解除となつて、どの家にもばあつと明るく灯の点つた時の嬉しさは未だに忘れない。夕爾の句もその時の句ときいた。私はどうも死ぬまで戦時の記憶を引きずっているようである。

雪女郎

續木文子

木蓮の雨降るごとにすこし咲き  
山道を紫すみれいざなへる  
吊し雛スカイツリーも仲間入り  
何食はぬ顔のたんぽぽ根は確り  
水は揺れ映る柳はそよぎをり  
雪女郎赤き鳥居に異界あり  
寒木瓜の灯しのいろに近寄りぬ

新涼

長崎桂子

改造の駅の階段涼新た  
初秋の風通りゆくローカル線  
染抜きの店の装飾秋涼し  
新涼のいがらっぽさや酢橘飴  
雲低く不漁の先駆け雁渡し  
白色の時計バンドのうす汚れ  
思ひ出しつい目の潤む夜長かな



### 台風12号

ビュービューガタガタと風の音、  
ばちばちと雨音、ごろごろバシャと  
雷、体が固くなって部屋から出られ  
ない。台風12号の影響で始った八月  
三十一日からの大雨、やっと日本海  
へ出たと思っていた。九月四日の朝  
七時頃より起った。早速四日市を  
中心とした、CTVテレビをつけ  
た。県下の主な河川の氾濫、外も危  
険水位を超えており、住いに割に近  
い河の右岸に亀裂が入り近辺に避難  
勧告と出た。落着けと自分に言い聞  
かせて心の準備を、不安の中で過  
ごす。午後一時過ぎやや雨音が弱ま  
り夕食時には注意報になった。疲れ  
た。お水をたっぷり飲み深呼吸。  
今年は気候の異変で続く災害。備  
えと心構えをもっと持たなくては。



放射能

早崎泰江

空蝉を拾ひてむなし掌

はやばやと鴉の落穂拾ひかな

明月や老人ホーム寂かなり

台風の去りし青空富士すがし

水瓶の萍あふる台風圏

稲撓ふ心よぎりし放射能

何事もなき一と日過ぐ秋の暮

十月 桜

堀内一郎

祝婚 二二句

蚯蚓鳴く母には母の旅支度

枝豆や地球の上に夜が来て

訃報なき町つつがなく夏送る

ほうとう秋父の語りし山津波

秋彼岸荒れ放題の墓に水

十月桜人はおほかた薄情に

集合写真に載らない私秋の雲

大宮に住み四十年近くが過ぎた。この家に引越して来た時、何よりも感激したのは二階の窓から富士山が望めたことであつた。

はるか遠き富士山ではあるが天候が許すかぎり朝な夕なにみる事が出来る。夏には夕焼を背に美しいシルエットを、又冬の朝には雪に日が射し燦然と輝やくのを、いつ見ても富士の姿には多くの感動を憶えるのである。

ところが近年この窓の風景に異変が生じ始めた。住宅が多く建ち並びそれに伴う電線が富士山を遮り、すっかり見えなくなつてしまった。我が家の宝のような折角の景観が失われて行くのが残念でならない今日此の頃である。

孫のお祝いに

本日は、お日柄も良く、光一さん 栄里ちゃんのお祝に、ばあさん共々 お招き頂き有難うございました。厚くお礼申し上げます。

さて世間では結婚は人生の「二人三脚」などと言われておりますが、内容は言わずもがな、ご両人足を揃え手を取り肩を寄せ合つてバランス良い人生を末永くお送りくださるよう端から祈念しております。

それでは、この栄えあるお二人のスタートに当り「ヨイドン」の代りに下手ながら、お祝唄「さんさ時雨」を歌わせて頂きお開きの言葉と致します。

へこの家、座敷は目出度いざしき 鶴と亀とが 舞ひ遊ぶ ショウガ イナ (ハアメデタイ メデタイ)

秋 桜 森 理 和

秋桜あなたわたしへのけふあした  
思ひ出は二人一つに秋うらら  
法師蟬苔守り遅々と石と化す  
竹の春ふはりゆらゆら人力車  
吠ゆ犬の止処なく吠ゆ秋の暮  
流水の湖底の色へ小鳥来る  
秋の日に高く低きに追ふ蜩

けふの月 山莊慶子

描かれし青き眸の秋意かな  
コスモスの仄かに揺れて明日のこと  
尖りくる思ひは空へけふの月  
蠓螂の表札のごとはりつけり  
猫の背に額を寄せて夜半の秋  
秋の宵オカリナの音を吸ひ込めり  
唐突に別れ鴉の声はげし

トマトジュース・酢・豆乳

起き抜けにトマトジュースと飲料用の酢を飲む。夕食を済ませると十時近くになってしまったために朝食はてんでんに掃除洗濯の合間に取る。因みに夫はマリビスケットと決めている。忘れもしません、喫茶店のサービスに出された一口のトマトジュース。それ以来四十数年よもやその味の虜になるとは。コップに軽く二杯。数年前に旅先で試飲した酒造会社のお酢は喉の痛みの速効。トマトジュースとお酢で風邪引きが間遠になりました。頭髮の激減に豆腐屋さんの豆乳を週四日は飲みます。豆腐屋さんの奥様の髪は黒黒されています。お豆腐好きの方も、生え際に生毛が戻りました。自身が身を持って感じ選択したサプリメントです。





## 虹の滝

吉成美代子

空割れて滝なし虹のおりてくる

一泊のルームキー受く蝉涼し

秋の昼天井白き検診台

秋晴やピアノが高く吊られをり

マスクしてマスクを避けて歩きたる

海苔粗朶の海くろぐろとならひ風

藁帽子かぶりて楚々と冬牡丹

## 尾 骶 骨

吉弘恭子

象さんの真うしろにゐて春昼

藤棚にスカイツリーの裾切られ

不可なくてすごすさくらの枚ひらのうへ

おばしまを渡り切らざる春しぐれ

春の日のすつつかりつつむ母の背

夏むかふぎぐしやくとして尾骶骨

そはそはと月のかけゆく衣紋坂

『俳句四季』九月号掲載



今夏の電力不足は巷の大いなる話題のひとつになっていた。我家は築二十年になったが、その時付けたエアコンはまだ動くようだ。居間では、夏は特別なことがない限りクーラーはいらぬ。冬はまたこれ特別なこと意外煖房はいらぬ。三度の食事の時だけ炬燵のスイッチが入る。

若い頃世界で唯一原爆が落ちた国にいて原子力発電所に抵抗がないのは何故だろうと思っていた。自分に出来ることは、意志を間接的にでも表明してゆくしかない、それが選挙。

つい当面の利益に頼りがちだが、選挙権が与えられた時のうれしさ。ドキドキしながら最初の一票を投票箱に入れた時の新鮮な気持ちをつまでも持っていた。三月十一日の様な事にならないように、頼まれたから投票などと言訳はきかない。

九月 赤座典子

四時過ぎて秋風抜ける銀座通り  
のびのびと長居する子等月今宵  
青空市野菜と並ぶ胡蝶蘭  
秋曇光背欠けし石仏が  
細き上に赤逞しき彼岸花  
年一つ重ねて眺む秋の薔薇  
好日と素直に言へぬ秋思かな

空 蟬 鎌倉喜久恵

酷熱に耐へし眼鏡を陽にかざす  
昨日夏今日秋が来て地球は変  
ジャガ芋のうまかり秋と思ひけり  
道なりにお行きなさいと彼岸寺  
いつか死ぬ彼岸の姉をなつかしみ  
栗ご飯去年はいつしよに食べたのに  
空蟬のからからからと夜を走る

出来ること

珍しく秋らしい日が続くと喜んで  
いたら、一気に寒くなってしまうた。  
東北の人々の冬仕度は間に合うの  
だろうか。  
何も悪いことなどしていない人々  
が、幾重にも被災し、全く先の見え  
ない生活を強いられている。  
被災後、健気とか偉いとか云われ  
るが、皆ずつとそう暮してきたのだ。  
東北へ旅行をした際、ガイドさん  
によれば、今年の福島のおくらんぼ  
はとても良い出来だったのに、食べ  
に来る人が激減で最後には、避難所  
へ配ったそうである。  
例年の案内作成も遅れているとい  
う。山形のラ・フランスで本当にお  
いしい。できる事を探し、ささやか  
でも応援を続けていきたいと思う。

去年の冬、姉がしくなった。  
腸閉塞を患って、永く鬱々とした  
日を送るなかにも、心は強く保ち、  
訪れるヘルパーさん達には明るく笑  
顔で接し、時にはお茶でもてなした  
りしてゐた。

母は一〇五才の長寿を保った。だ  
から感覚としては死はまだ遠いこと  
のやうに思つてゐて、姉もまだまだ  
一緒に居るものと思つてゐた。

俳句が出来ない。むづかしいとい  
つもぐずぐず言つてゐるけれど、姉  
のことを考へてみると幾つでも俳句  
が出来る。良し悪しなんて全く気に  
ならず、ただ出来る。作りながら  
ふつと涙が出たりする。

この気持、何かに書き残しておき  
たいと思ひ、この場には相応しく無  
いと思ひながら、姉を偲ぶである。

## 初冠雪

木村茂登子

初冠雪富士の宇宙でありしかな  
虹消えてお伽噺の国も消え  
地の花火彼岸にとゞけ曼珠沙華  
その中のことに秋茄子京野菜  
卯の歳の十五夜の月天心に  
十五夜のト際暗きものの蔭  
秋風に無情といふを知らされて

## 敬老日

篠田純子

顎上げて口角上げて敬老日  
えのこ草やくざにお茶を誘はれる  
敬老日人に無限の可能性  
隧道に大き我が影秋深し  
ペデイキュアの素足鎌倉喜久恵さん  
月は出たか月を見たかと言ひあへり  
防災訓練兼ねて町内秋まつり

## 富士山

猛威を奮った台風十五号のあと、  
初冠雪の富士山の映像を見た。  
富士山のほかは何もない晴天。  
長い年月習い事のため小田原へ  
通っていた朝夕、車窓から富士山の  
見られた日は一日中心が和んでい  
た。

富士山が見たくて国府津から御殿  
場線で沼津まで行く。そのまま又国  
府津へ戻ってくるという小旅行を何  
度かした。

お握りとミカンと如玉子を持って。  
国府津を出ると線路は大きくカー  
ブして、あつと驚くほど雄大な富士  
山がいきなり左側に現れる。

最初のその時の感動は今も忘れら  
れないものであった。

晩年は富士山の見える土地に移り  
住みたいと願っていたのだが……。

## 敬老日

敬老日という季語で俳句を作った  
ことは無い。

九月のある日、孫に幼稚園の祖父  
母参観の招待状をもらった。「ばあ  
ば来てネ！」に「はあい」と答えた。  
しかし内心「えっ!？」と思った。敬  
老日、祖父母という言葉は事実なの  
だが、どうも受止められない。そし  
て当日。どのおじいちゃんもおばあ  
ちゃんも(たぶん私も)満面の笑み。  
天使を見ているような幸せな気分だ。  
プレゼントに歌を歌ってくれ一緒に  
工作もした。最後には肩をとんとん  
してもらった。

ああ、こうして拔差しならないお  
婆さんになっていくんだなと思っ  
た。そして初めて「敬老日」の季語  
を使ってみた。出来た句を見て思っ  
た。「まだまだ だな。」

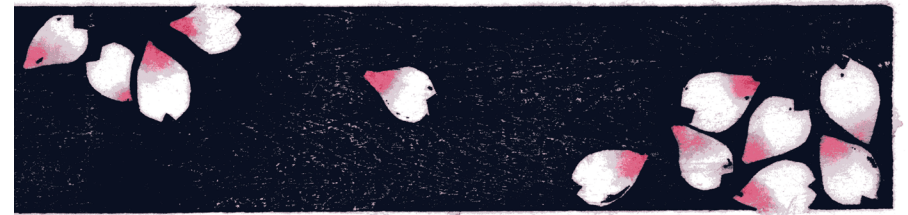
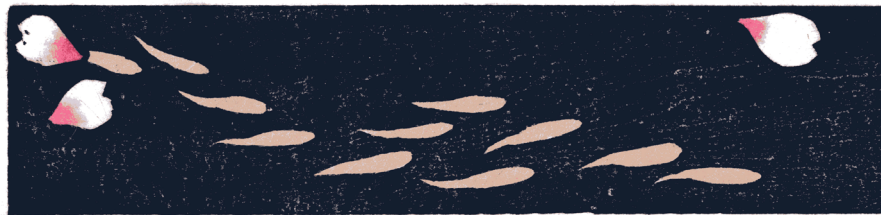
前月作品

空蟬や浄土の姿さながらに	えいママよ西瓜丸ごと買つちまを	十薬を残しをきたり草を引く	新涼の踝たたく心地よさ	さざなみを眼裏にため霍乱す	外燈が尽きて蛍の中にゐる	バイク屋の軒先つたふ青葡萄	午睡せる天使天才独裁者	節電は顔を消すため盆踊
木村茂登子	鎌倉喜久恵	安部里子	赤座典子	吉弘恭子	吉成美代子	山莊慶子	森理和	堀内一郎

喜孝抄

一人一句

住み馴れて蟬穴多くなりけり	志功展ねぶた祭の色基	信心のやうに鰻を称へけり	吸入に睫毛をぬらし合ふ姉妹	節電の日々の重さや夏果てぬ	滴るや一問一答するやうに	すずかけの木陰にしぼしバスを待つ	ハミングめく夫の軒良夜かな	またも見し瓦礫の中の盆踊
早崎泰江	長崎桂子	田中藤穂	竹内弘子	須賀敏子	定梶じょう	芝宮須磨子	篠田純子	佐藤喜孝



眞實ははにかみがちに竹婦人

佐藤喜孝

歳時記例句に

方丈に不入の間あり竹婦人

石川桂郎

があるように、「竹婦人」は小ささか気疎さを感じさせることば。実見したのはただ一度、民芸品の展示場のような所でしたらう。籠枕同様、涼をとるためのものでしようが、ある妖しさを感じたのは確かです。一方、「はにかむ」は、恥ずかしさを内に含んだ状態、慎しみ深い様子を言うことば。羞じろうであるべき竹婦人が本当ははにかんでい、そういう傾向にある、と。

この竹婦人を人になぞらえ、優しく見まもる如き作者なのです。

「はにかみがちに」の言葉の選択が、この句を成功させた。

手花火の小さき火玉の重たさよ

竹内弘子

線香花火。いぶっていた花火の先つぽに小さな火玉ができる。落下に堪えている火玉はやがて、蟻が見上げたら揚花火かと思紛うに違いない華麗な火花を放ち始める。落下に堪え落下に堪え、火花を放ちつづける。

「火玉の重たさ」がそれをなさしめる。

散りしを踏みて仰ぎぬ棕櫚の花

田中藤穂

棕櫚の花が、散り敷く、といえる程に地に散つてあるものかどうかしりませんが、少なくとも思わず踏んでしまうくらい落ちていたのでしょうか。そこで初めて棕櫚の花が頭上にあることに気づいたのです。踏みしめて初めて頭上を仰いだのです。

よくあることですが、それが棕櫚の花であることが特異。一度踏みしめてみたい、と思う。

そのままにゐることならず青葡萄

森 理和

「青葡萄」の句には

山国のけぢめの色の青葡萄

藤田湘子

つくたななしむらなきすべく青葡萄

中村草田男

などがあります。

意志的、あるいはポジティブな句が多い。熟した葡萄ならともかく、未成な葡萄を俳人が好んでとりあげるのは、その青さを肯定的に見ているからなのでしょう。理和さんも、永劫このままの青さでいたいと青葡萄は願っているに違いない、と。そしてその青さが、あたら失せてゆくのを惜しんでいるのです。青さは若さ、成熟は老いの兆し、ということでしょう。

空蟬の縫りつきをリブロック塀

山荘慶子

「俳句は一動詞」ということばを記憶したきっかけが、ある句会へ「ブロック塀攀ぢのぼりつめ蔦紅葉」を投句した時でしたらう。動詞を刈り込んだ方

仙台の澄切った空敗戦日

赤座典子

中七の措辞が正直すぎるか。とはいえ、仙台の八月十五日に格別の感慨を持つにちがいない作者には、「澄切った空」と平凡に述べるより他ないのでしよう。青年の頃に総計数ヶ月、仙台に過したこと

がいい、とアドバイスされ、同時に「ブロック塀」を上五に据えるのは少し重いね、とも。

慶子さんの句の「縫りつきをり」は、決して動詞過多とはいえませんが、「縫る」一語ですむものなら、その方がいい。あるいは、「ブロック塀」を座五に据えるのは、調べがやや重くなりはいないか。慮外を承知で拙句を例にあげたのは、掲句と余りに似ているからなのです。と言いましても、ブロック塀を薦が這うのは凡中の凡。ことさらにするまでもない景ですが、空蟬が縫るとなれば、これは発見です。無機物にすがって有機物が生を継ぐ。面白い。

そこで、禁忌にふれるようですが、敢えて。

〈ブロックの塀なり縫る蟬の殻〉としたら？

のある私にも、その澄んだ空を思い描くことができず。生まれ育った北陸とは異質とわかっていい、まして当時の東京の空とは全く異なる青さ。やっぱり、「澄切った空」と平凡に言うより他にないのです。

### 無聊の口占雨の足を眺めをり

鎌倉喜久恵

所在なさにただ夕立の雨脚を眺めている。そして、無聊の日々ではなく「無聊の日」。多忙の日々に対して、突然のおとずれのような徒然の一日。白雨にほっと一息ついて気がつく。そういえば今日は暇な一日であったと。通りすぎようとする雨脚をただ見送る。

但し、折角の句ですが、五月雨の脚とは言わない如く「白雨の脚」はいささか無理では。

一考を要すると思う。

### 夏終る惜しむにあらざる終るなり

木村茂登子

三月尽、九月尽という季のことばがあつて、酷暑

の夏をひかえて春を惜しみ、厳冬に向つて秋を惜しむ。だから、夏を惜しみ冬尽くを惜しむのは、水泳の選手とスキーに興じる人だけだ、という戯れごとがあります。掲句の「惜しむにあらざる終るなり」は、さてどうでしょうか。字義どおりにとるなら、夏の終ることを惜しんでいないことになりませんが、どうも私には然うとれないのです。

「惜しむにあらざる」と仰有る茂登子さんがまつさきに夏終るを惜しんでいるように思えるのです。「終るなり」と断定している処にむしろそれが見えるのです。

この句にそういう微妙なところがある。そして詩のいのちは微妙さにあること申すまでもないわけで、それを「夏終る」「惜しむにあらざる」「終るなり」と、三つの文言で言い止めた。秀句といつていい。



## 近世俳諧と漢詩文

四八

## 王岩

有千斤金、不如林下貧

ひだるさに馴れてよく寝る霜夜哉

惟然

惟然 生年未詳、正徳元年（一七一）二月九日没。本名、広瀬源之丞。別号に素牛・鳥落人・湖南人・梅花仙・風羅堂などがある。蕉門十哲の一人、美濃国関生れ。俗語や破調を駆使した口語調の作風を得意とし、口語俳諧の祖と呼ばれる。編著に『藤の実』や『双葉集』などがある。

前掲の句は『惟然坊句集』（秋峯編）に見える。句前の題「有千斤金、不如林下貧」は『全唐詩』巻八百六に載せた寒山の漢詩に由来する。

栄華能幾日、能く幾日か

眷属片時親。

眷属 片時の親



縦有千斤金、 縦え 千斤の金有るも  
不如林下貧。 林下の貧に如かず

寒山の貧を讚える詩句を前書きにして、惟然は腹いっぱい食えないほど貧しい生活に慣れ、霜の置く寒い夜を苦にせずに、すっかり夢境に遊べる詩人のイメージを活写している。

古来、貧を詠むのは漢詩の伝統の一つと言ってもいいぐらいである。俳諧もその伝統を継承して、よく貧を詠む文芸として成熟してきたようである。

元禄元年（一六八八）十二月十七日、芭蕉は深川の芭蕉庵で七人の門人と一緒に、唐詩人杜甫の「貧交行」に倣って、「貧」に關した俳諧を詠んだ。所謂「深川八貧」である。蕪村の句を読めば、貧に困んだ句も多く存在している。蕪村の「貧居八詠」はその代表作といえよう。

筆者もいつか中日の詩人たちの響みに倣って、次の句を詠み得たことがある。

梅挿すや清貧に処す反古の中 王岩



#### 広瀬惟然発句抄

うめの花赤いは赤いはあかいはな  
別るるや柿喰ひながら坂の上  
更け行くや水田のうへの天の川  
水鳥やむかふの岸へつういつい  
木枯や刈田の畔の鉄気水  
茶をすする桶屋の弟子の寒さかな  
夏の夜のこれは奢りぞ荒筵  
悲しさやをがらの箸も大人なみ  
肌寒き始にあかし蕎麦のくき  
此の冬の寒さもしらで秋の暮  
しがみ付く岸の根笹の枯葉かな  
目の前がかぶりつきたる大根かな  
誰かする今朝雑水の蕪の味  
鶯に又来て寝ばや寝たい程  
鶯のなけば今朝尚おきられず  
とりちらす檜木の中や雉の声  
山の幅啼きひろげたり雉子の声  
松茸や宮古にちかき山の形  
心なほ冬めくものかいかさまぞ  
たてつけの日影ほそしや水仙花

水仙や朝寝をしたる乞食小屋  
暖かさ水仙がああ蒼んだぞ  
冬川や木の葉は黒き岩の間  
あれ夏の雲又雲のかさなれば  
滝水の中やながるる蝉の声  
萩枯れて奥の細道どこへやら  
撫子やそのかしこさにつつくしき  
汐風の中より百舌の高音かな  
粟の穂をこぼしてこころ啼く鶉  
夕ぐれをおもふままにもなくうづら  
鶉もとまりまどふか風の色  
やれ菊のけふと思へばややたのし  
霜枯るるこの山陰や松の蔭  
半紙すく川上清しなく雲雀  
風呂敷に落ちよつつまん鳴く雲雀  
物干にのびたつ梨の片枝かな  
ない事よ桃のけふ程よい天気  
肌寒き始にあかし蕎麦のくき  
月雪の野はたしかなり大根時  
山の幅啼きひろげたり雉子の声  
水仙の花のみだれや藪屋しき

あを創刊十周年記念句集を読む

『遊び足』 木村茂登子

吉弘恭子

れがたい。土曜日となれば尚のこと。時間には限りがあるようでないようなもの、大人には。言い得て妙である。

薫風や後ふりむかず退院す

夜桜や大人の時間限りなし

桜の季節は寒い時もあれば暖かい日もあるという少しばかり気をつかわなければならぬ。しかし夜桜ともなると又格別な思いがおきる。

結婚前井の頭公園を出た所に住んでいたので、会社帰りには夜桜を愉しむ人、それを言訳にお酒をみんな嗜んでいる人、いろいろ。夜お花を見て歩くというのは桜ぐらひであろうか。あかりの中にぽつと浮んだ花の数々、時間が遅くなってもなかなか離

初夏の暑くもなくさむくもない心地よい風は心をほっとさせる。そんななか退院なされたのでしよう。中七の「後ふりむかず」には元気になつて前向きにという気持が十二分にあらわれている言の葉です。感情が内に秘められている分心もちがずしりと伝わってくる。

聖なる夜胎児のごとく眠りたり

クリスマス・イブの夜胎児のごとく眠るといのは……。私達の頃はモニターで胎児を見るなどと言うことは考えられなかった。今は目の前で見せていただけるようだ。

胎児のごとくとは、手足も冷たいのでくるとまゝるまって小さくなり寝てしまったのでしょうか。なかなか胎児の如くという語は出にくいのですが、イブだからこそその句であると思つた。やさしい気持になれそうだ。翌日気持の良い目覚めとなることであろう。

敗戦日しみじみ白い米を磨ぐ

昭和十六年生れの私は、物心つく頃に終戦後の食糧不足を体験した。小さいながらも麦飯は食べられなかつた。嘔吐してもキョロキョロと歯のすき間から逃げてしまう。健康に良いと現代は雑穀を入れてご飯を炊いているようだが、私は食べない、と決めている。ついあの時の苦さが頭をよぎるようである。白米で終戦日を思い出すとは何故かうらさびしい気がする。負けいくさであるが大部分の人は終戦日をほっと喜んでいたと思う。へ握りしめ嘔みしめ新米

の塩むすびも先句に通じる白米に対する思いがにじみ出ている

新米や朱鷺舞ふ里のコシヒカリ

朱鷺は、絶滅をどうにか免れて、すこしづつふえてきそうだ。生協では朱鷺支援として佐渡のコシヒカリを販売している。私も戦後新潟にいたのに朱鷺の存在に関心がなかつた。その罪滅ぼしでもないが、佐渡のコシヒカリを購入している。新米とコシヒカリが重複しているが新米の色と朱鷺が羽をひろげて舞っている様との絶妙な組合わせが好きだった。

我が家の秋の灯ぞ旅終る

旅行に出かけるのは普段の雑用から解放たれて、肩の力がスーと抜ける。この句のように、旅に出かけた時の昂揚感は何にも代え難いが自分の家に帰ってきた時の安堵感。ましてや家に灯がつ

いていたなら尚更のこと座五の旅終るが情思をじ  
わつと感じさせて思いの深い句となった。

「遊び足」に納められてある二百五十句の中に  
二十句ほど神仏に関する句が見られた。信仰心が足  
りない私にはとても羨ましかった。

旧街道お大師さんへ冬うらら

初詣氏神木花開耶姫命

川崎市川崎区大師初しぐれ

左大師右石観音日脚伸ぶ

坐してゐるだけで癒され秋の寺

山焼や許されし火の美しく

剥がされさうな訃報二月の掲示板

四月馬鹿獲物の方が上手にて

飾り太刀男はかつこ良く生きよ

父母の掌の中に手を七五三

春風や観音様の「遊び足」

雪霏霏とこの世の音を消しつ積む

牧水も夢二も青は寂しといふ

十三夜身辺音もなく更けて

雨戸閉つおとしめやかに十三夜

茹でたまご素直に剥けず春の風邪

剪り取れば風にも耐へぬ芒かな

さくらんぼ分けて奇数と偶数と

大寒の朝の目薬注し損ず

花吹雪いさぎよしとも狂ふとも

最後に好きな句を掲出させていただく。

等、五句目以外茂登子さんの心もちは句の表面には  
出ていないが読み終えるとほっとするような、穏や  
かな気持ちになっているのが分った。

あをキーワード俳句辞典(きざーきじ)

階

階にこぼれ萩とも松葉とも

階をトントントンの桜の朝

三学亭へ急な階冬紅葉

階に顎こする猫日向ぼこ

刻む

まな板に葱刻む音春めいて

大根の葉もねもごろに刻みけり

調理場は仕込み始めの葱刻む

尼が刻むやあまりに葱の匂ひけり

葱刻む不徳許せし人の居て

夜露降るリズムを刻む北斗星

菜を刻むちんちろりんにながされ

母の味思ひつ刻む節料理

ガリ版は月の光を刻む音

岸

花の名を補ひ合ひて春の岸

神輿乗る平らな船が岸に寄る

吉弘 恭子

東 亜 未

赤座 典子

篠田 純子

栢森 定男

芝 尚子

芝宮須磨子

定梶じよう

須賀 敏子

森 理和

長崎 桂子

森山のりこ

佐藤 喜孝

赤座 典子

篠田 純子

荒川の左岸で摘みし蓬かな

着岸す白聖のごとき鮪船

鴨の背借りて立ちたし向う岸

山峡の両岸繋ぐ鯉のぼり

クリオネも共に流水接岸す

向ふ岸日傘会釈す入り日かな

記事

山百合を包む鈴木宗男の記事

爽やかや一面記事のパラリンピック

儀式

鮎を食ぶ儀式のやうに箸つかひ

忌日

穀象に詳しき祖父の忌日来る

ひしひしと菊の黄母の忌日なり

新蕎麦をかために父の忌日なりし

三々五々虚子忌日和の句会かな

須賀 敏子

竹内 弘子

森 理和

須賀 敏子

木村茂登子

吉弘 恭子

後藤 志つ

東 亜 未

鎌倉喜久恵

竹内 弘子

渡邊 友七

鈴木多枝子

鎌倉喜久恵

毎月25日発売  
定価900円(税込)

# 月刊俳句界 2011年12月号

## 1億総俳人

～1億人の数だけ詠う理由がある～

◆巻頭エッセイ 日本という詩歌の国  
**中西進** (万葉学者)

◆私が今、詠いたいこと  
松本旭 山本洋子 奥坂まや 岸本尚毅

◆論考 エッセイ  
伊達甲女 室生幸太郎 堀本裕樹  
生駒大祐 日下野由季 小西洋二  
西池冬扇 玉城一香

「カラケラビ」俳句界NOW 倉田紘文

本誌投句欄選者豪華10句競詠  
有馬朗人 池田澄子 大串章 辻桃子  
廣瀬直人 坊城俊樹 他

もう類句とは言わせない!?

○類句の基準 森田純一郎 加藤瑠璃子  
○類句判定してみます!  
加古宗也 野田禎男 中本真人 石井いさお 他

※注目の俳誌※ 「千種」

魅惑の俳人 能村登四郎

対談 佐高信の甘口でコンニチハ!  
ゲスト 梶 芽衣子(女優)

〈新作三句〉  
友岡子郷 岡部榮一 河内静魚  
山尾玉藻 大岳水一路 岸原清行

第二回北斗賞発表! 堀本裕樹



※一部変更の可能性あります。

株式会社 文學の森

お求めは... 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

あとがき 今号からいよいよ新しい誌面構成になった。会員の俳句作品が一段と引き締ったやうに見えるのは鼻肩目であらうか。短文の心情吐露とははせて興深くなつた。私は七句を一つの作品としてまとめ上げたいと思つてゐるがそのやうにはなかなかゆかぬ。

特別作品を待つてゐる。テーマを決めこつこつ作り上げた作品。旅行吟、身辺に起きた事などを十句以上にまとめて下さい。お待ちしてゐます。〈特掲載月は通常作品休稿も可〉

(喜孝)

ご厚志多謝

須賀敏子様・森 理和様・吉成美代子様

二〇一一年十一月号

発行日 十一月十二日  
発行所 東京都中野区中央2-50-3  
電話 090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト カット/恩田秋夫・松村美智子 佐藤喜孝 竹徳房

郵便振替 00130655526 (あを発行所)  
会費 一〇〇〇〇円 (送料共) / 一年

乱丁・落丁お取替えます。